

〔巻頭言〕

〈Vos estis sal terrae 汝らは地の塩である〉
創立六十周年記念を迎えて

末吉 高明*

日本現代史において、二〇〇九年は、今後いかなる評価がくだされようとも、歴史家が必ずや参照するものとなるであろう。いうまでもなく、日本政治史上はじめて、国民が投票行為を通して政権交代をなした年だからである。

他方、四国学院にとって、二〇〇九年は、創立六十周年を記念する年であるが、その歴史的意思是、個別学校法人としては、国家レベルの政権交代を凌駕する衝撃をもたらす結節点として記憶されるかもしれない。それは、端的に、本学は、六十周年を機として、巷間（フンボルト理念…研究者の共同体）として表現されてきた近代日本の大学カリキュラムをささえる中核理念からシフトして、ユニバーサル段階における新たな大学のありかたを追究する決断をしたからである。二〇一〇年度、本学は十九メジャー・プラス・一マイナーの総合教養教育カリキュラムを開始する。

大学は、本来、研究を通しての共同体あるいは研究者養成を目的とする機関であるとの認識は、十八歳人口の五十パーセント以上が入学してくる現状において、私たち大学人の頭の中にのみ存在するフィクションである。研究と研究者の

* Takaki SUEYOSHI 本学学長

育成を主として行っている大学は、現代日本の大学において、ほんの一握りにしか過ぎない。九十パーセント以上、ほとんどの大学は、「善き市民」への「高等教育」を行っているのが実態である。大学教育を受け卒業した人、あるいは、大学の現場を知悉している人にとっては、この事実は改めて確認することもないほど明白である。ところが、問題は、現代日本の大学の教学を編成している原理は、十九世紀ドイツに発して、研究者共同体たんとする近代大学制度を動かすものと同じである。このことは、一部の大学教育を真摯に考えてきた大学人を除いて、まともに問題とされてこなかった。なぜなら、日本の大学では、組織としての営為は、教育機関としてではなく、圧倒的に教授陣が牽引する研究機関としての歩みに焦点をあわせ、大学が迎え入れる学生の視点からカリキュラムを見返すことは皆無であつたからである。

四国学院も、他の大学の歩みと軌を一にして、学部、学科、ゼミ形態を研究者共同体の衣裳として発展させて来た。しかし、六十周年を分水嶺として、脱構築的に〈研究共同体理念〉から、〈高等教育キャンパス理念〉にギアを切り替えた。将来、日本の多くの大学が歩むべき方向と本学が現時点で決断した径路とは、おそらく交差し合流すると思われる。教学改革の決断と同時に本学が制定したモットー〈*Vos estis sal terrae* 汝らは地の塩である〉が照明するアングルは、研究を抱懐しつつ、まず、高等教育がなされるキャンパスである。私たちの研究メディアたる四国学院『論集』も、専門研究にとどまらず、〈教育研究〉の地平に展開されるべき時が到来した。